慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	遠藤友四郎著 無政府共産主義の根本批評
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.10 (1922. 10) ,p.1493(119)- 1496(122)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221001-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

働者に福音を與えることであつた。」「汝等の魂は忍んで待ち望めば、主の來り給ふは間近にあり、と果して主は來ませり。バベルの塔の倒れし如く、更に恐る可き極惡非道の黃金の虐政も遠からず倒る可し。時至れば勞働は自由の天地に解放され、全地は主の智慧を以て充され、世界は神と聖者のみによりて治められん。この時ぞ、自由、平等、博愛は示され、天上には榮光神にあれ、地には平安、人には惠あれと、萬國民は永久に讃め歌ふのである」と、豫言者の如く、野にありて叫んだのであつた。(Alton Locke. p. 433)

キングスレーはその當時既に「神の意志であり又その賜物である民主主義」が、英國を初め世界の政治的社會的組織を改變せんと、非常な勢を以て押し寄せつつある風潮を洞察したのであつた。(Alton Locke. p. 405)「民主主義は、教會及び國家の新要素である、今やその善惡を論ずる暇もない程、押し迫つた問題となつて來た、吾等は今日ただ、民主主義を基督教化することである」と。(Mrs. Kingsley: op. cit., p. 58)「吾等の欲する眞の民主主義は教會や女王を度外視しては、存在の理由なく、尙ほ又紳士社會も其存在の上に必要なるものである」と、彼は考てた。(ibid. p. 130) キングスレーは本質的に、カーライルの影響を受けた、よき意味に於ける貴族主義者であつた。地主階級の貴族主義は國家を幸福にするものであり、地主階級なくして最高の自由を國家は獲得することが出來ないと迄考へたる程、彼の民主主義は貴族主義的であつた。(Hughes: op. cit., p. 24)

嘗て「自分は革命家ではない」(Mrs. Kingsley: op. cit., p. 56) と表明した彼がその二年後、即ち一八四八年の初夏に The Cranbourn Tavern に於ける chartist との會合の席上に於て「I am a church of England, and a Chartist」と大膽に宣言したのである。(Hughes: op. cit., p. 19) 好戰的な血を受けた彼は敵に對して勇敢に挑戰したことはあるが、それは本質的なるものではなく、反つて彼の敏感なる性質が、ややともすれば彼をしてかく大膽に行動せしめたのであつた。(ibid., p. 24) されど彼の本質は革命家ではなかつたのである。モーリスと異りて、キングスレーは詩人であつた。耳目に觸れる悲慘なる物語社會の害惡に接して強く感じ、感情の向くがまに、宗教的熱愛に驅れて、民衆の中へと出でたのであつた。貴族の生活、習慣に多くの憧れを持つ彼は自己の周圍に集れる民衆の內に全くはいれきれざりし悲哀を他面に於て有するものであるが彼の良心と、正義の心は彼の身命を賭して社會の渦卷の中へと身を投じたのである。さわれ靜溫なりし彼の後年を省みる時、彼自身を云ひしが如く、キングスレーは「革命家でもなく、」「豫言者及び豫言者の息子でもなく」、洵に彼は、「羊を飽ふ牧羊者であつた」のだ。(ibid., pp. 25-26) (完)

新刊紹介

遠藤友四郎著

無政府共産主義の根本批評

四六版　四五五頁
二圓五十錢　下出書店

所謂危險思想の內で最も危險視せられる程度の高いものは無政府共産主義であらう。明治大正時代を通じての筆禍史の重要な部分は恐らく無政府共産主義の主張者によつて占められてると云つても差支ないであらう。今回寄贈を受け

た遠藤氏の著述は、無政府共產主義殊にクロポトキンの思想の本質を解說し、且つその根本的誤謬を指摘したものである。長文の序論と緒論の外、無政府共產主義の意義と歷史、その缺點概觀、人類學及び生物學的誤謬、社會學及び經濟學的誤謬、クロポトキン思想の美點、世界主義の魅力と日本民族の優越性、並に結論とを以て本文二九〇頁を終り、更らに附錄一七〇頁が附けてある。

著者の批評の對象となつたものはクロポトキンの無政府共產主義である。著者はクロポトキンの主義を要約して次の十とする。（一）人類の本性は相互扶助にある。（二）法律、政府、階級は少數權力者が作つたものに過ぎない。（三）從つて國家、法律等は不都合のものである。（四）一切の富は人類が共同して生產したものである。從つてそれに對する私有權は認容すべきではない。（五）各人は生存權と共に享樂權を有する。（六）資本主義社會に起る革命は無政府共產主義である。（七）代議政治と賃銀制度は資本主義を維持擁護する。（八）財の分配は各人の必要に應ずる。（九）生產は地方分權的に各團體の自由合意に放任する。（一〇）貨幣を用ゐない。（八三頁以下）以上の特徵をクロポトキンは持つてゐる。

扨て、クロポトキンの批評に入るに先き立つて、その美點を擧げて見ると、著者は次の點にこれを求める。（一）社會の富は過去並に現在のすべての人々の共同勞働によつてのみ生產されたとする思想である。（二）著者の名附けて期間的身心交代の萬人勞働主義と稱する精神並に肉體兩勞働の調和である。著者の評言を借りれば「その農工業の調和說、筋肉精神勞働の綜合觀に至つては、今若しこの可能性に富む學理を實行したならば、居乍らにして理想社會の扉は眼前に開かれるのにと思はれるほど、それほど捨て難い獲物である。（三）クロポトキンがパン問題を先決問題としたことである。（一九六―二二四）

著者は以上のクロポトキンの美點を認めも以外の批評にあつては殆ど否定的である。相互扶助說に對しては、ダアウヰン學徒が生存競爭の方面のみ力說したと同じやうに、クロポトキンが相互扶助を以て進化の一要素と認めながら、その社會進化並に無政府共產主義においては、相互扶助のみを强調したと云つてゐる　更らに法律、國家の問題に就いては、一般的に民衆がこれを否定するものでないことを主張する。資本主義の手段としての法律並に國家は勞働者の排斥するところであるが、社會主義の機關としての法律、國家は勞働者は歡迎すると著者は云ふ。けれどもこれも一般的には云ひ得ない。勞農露國において法律の濫發に困惑してゐるのは勞働者ではないか。（八九以下）著者はまだクロポトキンは勞働獨裁の國家に對して實際は眼をつぶつてこれを容認して死んだ、即ち彼が國家社會主義化したと云つてゐるが（九二）これは最近の「改造」で大杉榮氏の紹介したバアクマンのクロポトキンの回想などと異ふが、この點は何と說明さるゝのであらうか。社會學的缺點として

は、自由（無政府）と平等（共產）とが如何にして調和されるかと云ふ點を擧げてゐるが、この點において無政府共產主義が嚴正に批評さるべきではないかと思ふ。次に代議制度と賃銀制度の廢止も實際に適さない。ロシアには何等かの形の代議制度と賃銀制度があるではないか、と著者は云ふ。代議制度並に賃銀制度に關しては私はギルド社會主義者の批評に從ひたいと思ふ。從つて、國家社會主義者たる著者の態度とは異つて來る。經濟學的缺點としては、各人の要求によつて財を支給する場合は生產力が甚だ增大しなければならず、更らにまた共產無政府の社會は何等命令組織のない社會であるから、需要と供給との調和が不可能になる點を擧げてゐる。この點を無政府共產主義の一大難點であることは否定し得ないが、ある程度までは、需要と供給との調和は自由發意と自由合意でなし得る筈である。無政府主義下における鐵道は衝突そのものであると云ふ高畠氏の所論は無政府主義のこの點を觀過したのではなからうか。（一一二）國

家社會主義者としての著者の立場から、もう一つの批評は、クロポトキンのコスモポリタニズムに對してである。著者は飽迄現實に即して、國家生活を主張する。世界人と云ふものはあり得ないと云ふ。さうして白人對有色人種の差異を強調する。諸國の社會並に經濟狀態から、各國の社會運動がそれ〴〵の特長を持つてゐることは事實であるが、殊更らに國民主義を振翳す必要があらうか。マルクスの國際主義の實現は甚だ遠い將來においてであらうが、これに反對するの理由を見出し得ない。

要するに「無政府共產主義の根本批評」は、著者の私信にも云つてゐる通り、「此中の肝要の處を、頭の中に溜つてゐる儘を、一氣に書いたもの、氣持の勝つたもの」である。故に外國のドクトル論文にあるやうな組織と廣汎な文獻引用はこれを見出し得ないが、國家社會主義者としての著者の無政府共產主義に對する嚴正なる批評と所謂日本の學究者の著書には見出し得ない日本の諸學者、思想家に對する批評の開かれるのには興味を感ずる。この點において私は吉野博士と共に「平易暢達なる文字の中に、飽かずこの復雜なる問題を了解せしむる老手には敬服せざるを得なかつた」と云ひたい。（中央公論九月號時論參照）

（加田哲二）

野村兼太郎譯

「英國經濟史及學說」上卷

菊版　三五〇頁
定價二圓八十錢
岩波書店發行

前世紀の最後の二十五年間英國の經濟學者も亦經濟史に著しい貢獻を爲した。Birmingham の W. J. Ashley 教授と Cambridge University の W. Cunningham 教授とは此方面に雄たる人々である、と J. K. Ingram は述べてゐる。Birmingham 大學教授 W. J. Ashley 氏は我に述べるまでもなく現代斯界の權威者であり、十指に餘る名著を有してゐる。就中其 An Introduction to English Economic History and Theory は著名な、學者的な研究の集錄であつて、英國經濟史を研究するもの、必ず精讀しなければならぬものである。Volume I を分つて Part I と Part II となしてゐる。本書は此 Part I の譯書である。

原著は Part I を The Middle Ages と題して第十一世紀より第十四世紀に至る期間を取扱つてゐる。初版は一八八八年第二版は一八九二年第三版は一八九四年に出でゝゐる。Part II は之を The End of the Middle Ages と題して一八九三年出版せられた。第十四世紀より第十六世紀に至る期間を論じてゐる。

本書は三節より構成されてゐる。第一章はマナァ及村落共同團體、第二章は商人ギルドとクラフト・ギルド、第三章は經濟學說及法制を主題となし、順次に六節、八節、九節に細分されてゐる。そして各章の始めには其れが史料を載せてゐる。

彼はマナァを說〴〵に當つて十一世紀から始めるのが適當であると看做してゐる。何故ならば當時に於いて中央英國の全體が本質的に同一特徵のマナァを以て蓋はれたことは確かに疑ふことは出來ないし、又如何にしてさう云ふ狀態になつたのか少しも一致しないからしてそれ以前から始めることは出來ないからであると。從つて彼は、自由民と奴隸民と何れが先きであるか、マルク制度がマナァ制度に先立つてゐるか始めからマナァ制度であるかの問題には、マナァ制度自體を明かならしめる爲の外は論及してゐない。斯くして彼は第一章に於いてマナァ制度の一般を說明しマナァの起源、經濟的特徵、自由小作人の增加等に筆を及ぼしてゐる。

第二章に於いては先づ商人ギルドに言及する。「商人ギルド若しくはハンス――兩者は同意義に用ひられる――は最初商業を行ふ特權の獲得及維持を目的として形成された一團體であつた。――其特權は各都會に於いてギルドの仲間